

類 似 表 現 対 照 表

番 号	原 告 の B B O 理 論	被 告 の い う 2 M D 理 論 (甲 9)
1 - 1	「 B . B . O . の 基 本 的 な 概 念 は , 人 は 直 立 し て 生 活 し て い る こ と に は じ ま り ま す 。 」 (甲 3 , 55 頁 左 段 14 行 目)	「 ヒ ト は , 直 立 二 足 歩 行 す る た め に 」 (115 頁 左 段 6 行 目) 「 ヒ ト は , . . . 直 立 二 足 歩 行 が 原 則 と な る よ う に 形 作 ら れ て い ま す 。 」 (121 頁 中 段 5 行 目)
1 - 2	「 人 間 は 直 立 二 足 歩 行 を 行 う 構 造 上 」 (甲 1 , 4 頁 13 行 目) 」	
2	「 生 理 的 咬 合 」 (甲 8 題 目 , 38 頁 左 段 7 行 目 , 右 段 26 行 目)	「 生 理 的 咬 合 」 (116 頁 右 段 16 行 目 , 22 行 目)
3	「 B . B . O . で は カ ン ペ ル 平 面 (鼻 聴 道 線) を 基 準 に し ま す 。 咬 合 平 面 は , カ ン ペ ル 平 面 と 平 行 に 設 定 さ れ ま す 。 」 (甲 2 , 49 頁 右 段 18 行 目)	「 咬 合 平 面 は カ ン ペ ル 平 面 と 平 行 と な る こ と が よ い 。 」 (115 頁 左 段 3 行 目)
4	「 下 顎 体 は 筋 肉 に よ っ て 吊 り 下 げ ら れ て い る た め に , 常 に 地 球 の 引	「 簡 単 に 言 え ば , 下 顎 体 は 頭 蓋 骨 に よ り 筋 肉 や 腱 に よ っ て , ぶ ら 下 が っ

	力の影響を受けており，そのためにいつもある一定の水準を保ちながら運動していると考えることが出来ます。」（甲2 47頁右段4行目）	ているだけといえます。」（115頁右段最終行から） 「要するに動く下顎体は重力の法則に従い，絶えずそのバランスを一定に保とうとして動き，・・・と考えました。」（116頁左段6行目）
5	「顎関節に症状が出現するとすればそれは，歯牙が中心であり」（甲3，57頁右段最終行）	「顎関節症の問題として考えてみますと，・・・その先には歯牙があります。外的な力が顎関節そのものに作用しない限り，顎関節に異常をきたす原因は，上下の歯の咬み合わせが主に考えられます。」（116頁左段13行目）
6	「正しい咬合が，姿勢を保っている」（甲2，54頁右段5行目）	「生理的咬合での正しい咬合弾道（刺激）が体形を整え」（116頁右段21行目）
7	「頭蓋が傾斜すると人間は重力に対して動的安定を得るために骨盤は頭蓋の重心に対し，傾斜し回転する。頭蓋傾斜は顎関節の歪を示しその傾斜に対応して骨盤内の仙腸関節は変位するのである。」（甲1，3頁1行目）	「脳自体にある平衡感覚機能が右上がりの脳底を水平に保とうとするため，顔を左上方に向け，頭は右傾斜するのです。」（115頁左段最終行目から）

8	「特に重力に対し顎関節と仙腸関節は可動域が大きいところである。」（甲1，3頁4行目）	「動くためには引力（重力）に抗しなければならぬため，単一でもっとも運動範囲の広い関節（顎関節や仙腸関節）が最も引力に左右されるのです。」（121頁中段9行目）
9	「人間の体は，力学的なバランスの上に成りたっている。そのバランスが崩れれば当然様々な症状が歪みという形で現れる。特に，頭位はその人の姿勢と深く関係しており，姿勢制御機構の前方半分は咀嚼筋が関与，後方は後頭部筋群のバランスによって決定される。即ち，咬合の変化（咬合平面の変化）は頭位の変化として現われ，その変化は骨盤内の仙骨が拮抗することによって対応している。」（甲1，3頁6行目以下）	「生体は，・・・そのバランスが許容範囲を超えた時に，種々の体調不良となって現れます。」（117頁左段最終行以下） 「身体がバランスを変えて対応しなければ，その人の許容範囲内であれさほど問題にはなりませんが・・・身体と咬合のバランスが許容範囲を超えたときに身体の症状として現れることがあります。例えれば，ここに下を向いて生活している人がいます。・・・そのように，下を向いて生活している状態を上向きに印象して製作した補綴物は，身体と咬合のバランスを変えてしまい，その結果，噛み難くなるのです。」（121頁左段2行目以下）
10	「頭位のズレが骨盤内の仙骨の対	「顔面頭蓋骨の歪みは腰の歪みでも

	応移動許容量（閾値）を超えると、腸骨そのものにも歪が生じてくる。」（甲1，3頁11行目）	あり，」（114頁右段17行目）
11-1	「噛み合せ→上アゴの歪み→頭の骨の歪み」（甲8，39頁図16）	「上顎骨の歪み（原因：遺伝的要素・食生活・抜歯・充填補綴物）が上顎骨と関節でつながっている口蓋骨水平板（＝蝶形骨の底部）の歪みとなり，蝶形骨と脳底部は同一なので脳底部が歪み，側頭部・前頭骨・後頭骨・頭頂骨が歪みます。側頭骨の歪みが側頭鱗の歪みに，それが咬筋の走行方向までへと変化を起こします（これが顔の変形）。」（117頁左段3行目以下）
11-2	「噛み合せ→側頭骨のズレ→顔貌の変化」（甲8，39頁図16）	
11-3	「呼吸と共に動く頭部の骨は蝶形骨のみならず前頭骨・側頭骨・後頭骨及び上顎骨にも連動して動いている」（甲1，4頁9行目）	
11-4	「蝶形骨は頭蓋の中では一定の角度で安定的に水平であろとするので延長線上に（上顎骨に接続する）ある上顎骨のバランスがとれていなければ，呼吸のバランスもとれにくくなる。」（甲1，4頁25行目）	
12	「頭の骨の歪み→上アゴの歪み→噛み合せ→下アゴのズレ→骨盤の歪み→首・背骨の曲がり→神経の	「頭蓋が歪むと仙骨が歪み，上顎骨に相応する下顎骨の歪みが腸骨の歪みとなり，仙腸関節の歪みから順に

	圧迫 → 全身症状」 (甲 8, 39 頁 図 16)	腰椎の歪み・頸椎の歪み・胸椎の歪みに移行し, それぞれの部位に相当する自律神経や知覚神経・運動神経を圧迫して不定愁訴の原因となる」 (117 頁 左段 12 行目以下)
13	「B・B・Oの咬合基準は下顎の咬頭頂を結んだ線である。・ ・ ・ しかしながら, ・ ・ ・ 下顎咬合平面に対咬している上顎咬合面を一応の基準としている。」 (甲 1, 6 頁 1 行目以下)	「では, いかに正しい咬合平面を再現するかを考えますと, 先ず上顎を常に一定の基準を設けて観察・分析し, 」 (117 頁 中段 12 行目)
14-1	「上顎の咬合平面の基準はカンペル氏平面を用い, 上顎咬合平面がカンペル氏平面と平行になるよう設定している。」 (甲 1, 6 頁 5 行目)	「ハノー H 2 O 咬合器を使用する意義は, 上弓がカンペル平面に平行に想定してあること。」 (119 頁 右段 2 行目 ~ 4 行目)
14-2	「通常咬合器は, 図 5 に示すように, ハノー 145-2 型を使用します。B・B・O テーブルの面は, 常にカンペル平面に平行になるように設計されています。」 (甲 4, 64 頁 左段 20 行目)	

		下顎体自身の歪み変形も解除されていくわけですね。」（117頁中段12行目以下）
18	「ワックスは咬み切らない様にします。咬み切ってしまうと、その上下の歯牙が咬み合った所を支点として、下顎骨は回転運動を起こすからです。」（甲2、51頁右段7行目）	「上顎骨は二次接触を捜して・・・回転運動を始めます。」（116頁右段2行目）
19	「BB0理論によれば、一次接触が下顎偏位をおこし、頭位の変化（頭蓋の歪み）、全身の姿勢の変化（体の歪み）となって現れる。」（甲7、24頁右段7行目）	「一次接触が・・・のです。それが習慣的に成されるならば、骨体自身の変位・変形をも起こし」（116頁右段5行目）
20	「理想的には各歯牙1点ずつ垂直な圧が加わる位置で接触できるよう、咬合調整をおこなう。」（甲8、34頁右段8行目）	「故に、すべての歯が一次接触であれば理想の噛み合わせとなる。」（115頁左段1行目）
21-1	「つまり、咬合の応力の支点が支持線側（左側）にあるからです。その結果、反対側（右側）の歯牙に二次的に強く当ることにより、	「一次接触部位がてこの支点となり上顎骨を変形させ、二次接触部位に過重負担となり・・・と考えられます。」（116頁右段12行目）

21-2	歯牙は破壊されやすくなります。」（甲5, 71頁右段9行目） 「片側のみが高い場合, 高い側に一次接触は残存するが, 歯冠破折は起りにくい。むしろ低い側に強い二次接触が起き破折しやすい。」（甲5, 71頁図16説明文）	
22	「Aは, 一番高い歯で咬合時一次接触となり, 最後まで残存する。①, ②, ③は破壊されてゆく順序を示す。」（甲5, 72頁図20説明文）	「一方の歯牙が基準面より高い場合は, 対合する歯牙は本来の位置より低いため, 基準面より高い歯牙が食い込むことになり, 低い方の歯牙に過重負担となる」（116頁右段17行目）
23	「咬合採得を立位で行なう必要性の第1は頭位を支える筋肉群と骨盤の位置を固定安定させる筋肉群の調和を取るためであり, ……。この立位もしくは座位でない場合は後頭下筋群が過緊張又は過伸長となり……。この結果, 身体に歪を生じさせることになる。」（甲1, 9頁1行目以降）	「股関節のバランス調整を除外するため座骨で座らせ, ……身体・頭部を修正していきます。」（118頁中段22行目以下） 「背もたれにもたれることにより, 筋肉が緩み, 全体のバランスが変わっているため, 正確な背骨の捻れが模型に反映されない」（119頁左段10行目）
24	「しかるに咬合器に模型を装着	「咬合修正治療法は次の二つの方法

	後，その空隙の部分を挙上するか，一次接触部位を削合して同時接触させるようにしなければならない。」（甲8，38頁左段33行目）	に分類します。すなわち，削合による場合（咬合挙上しない）と咬合平面修正による場合（咬合挙上する）です。」（120頁左段12行目）
25	「このわずかな咬頭干渉が障害を引き起こすことを認識することが大切である。」（甲8，38頁左段35行目）	「ほんのわずかな削合により咬合が変わり，・・・咬合が安定していくのです。」（120頁中段1行目）

類似使用写真（図）対照表

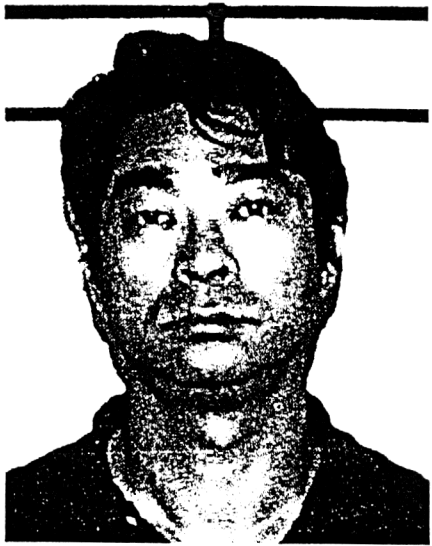
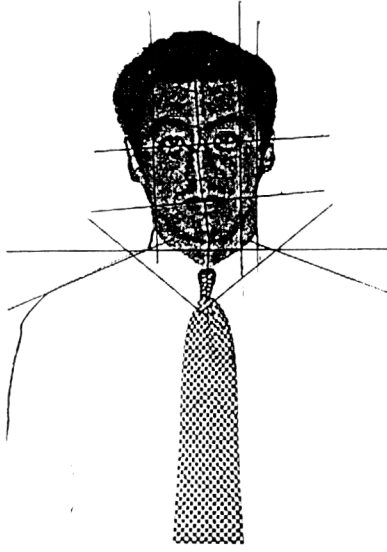
甲 9 で 使 用 の 写 真	甲 1 乃 至 8 で 使 用 の 写 真 （ 図 ）
写 真 1  写真1 頭蓋骨が右後上方に変位しているため、頭部を右に傾け左上方を向いている状態。	甲 8 、 図 7  図7 （術前）鼻骨の曲がり、鼻の頭の左への曲がり、下顎全体の左へのスライド(上半身正面)

写真 2



写真2 腰が右後上方回転している状態。

甲 8 、 図 8 及 び 9



図 8 (術前)頭位全体の右への弯曲、
傾斜(全身正面)

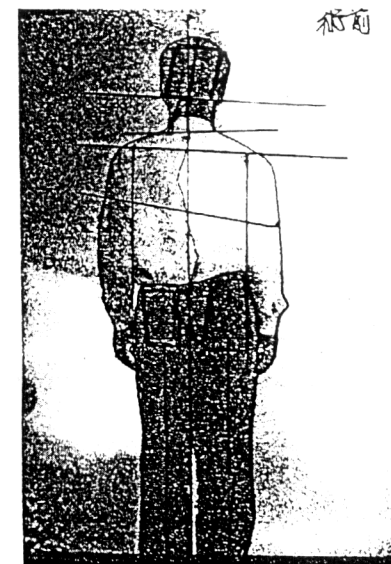


図 9 (術前)頭位右傾斜、右骨盤の上
昇(全身背面)

写真3 (身体立位側面写真の変化)



姿勢を正す前

咬合調整後1ヶ月後

写真3 身体立位側面の変化。

甲8、図10及び15



図10 (術前)眼線の上向き、腹の反り返り、かかとへの重心(全身側面)



図15

写真3 (顔の変化)



顔の変化:姿勢を正す前 姿勢を正し15分後 咬合調整後1ヶ月後

甲8、図12

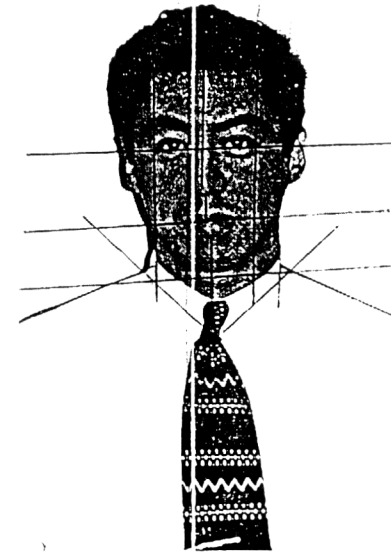


図12

写真 3 (模 型 の 違 い)



模型の違い:姿勢を正す前 咬合調整後1ヶ月後

甲 8 、 図 5 及 び 1 1

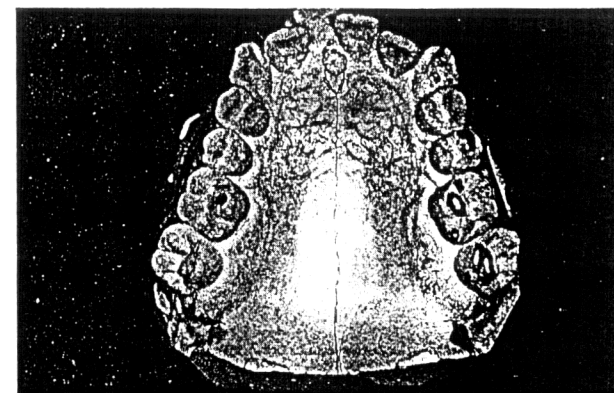


図 5 - ① 咬合調整した部位を示す。(上顎)

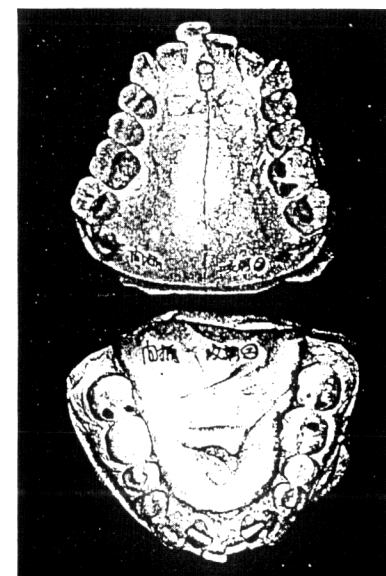


図 11

写真4（身体の状態の診断と修正方法 甲8、図1
法）

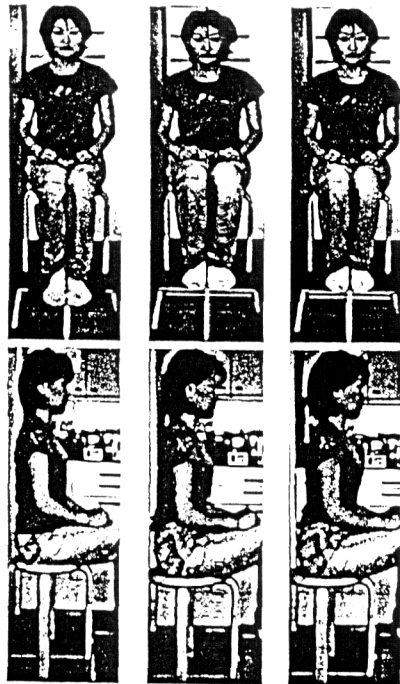


写真4 身体の状態の診断と修正方法。
写真左から右へと腰の位置・背筋・上
体左右傾斜・頭部の傾斜を修正する。



図1 被検者を椅子に座らせた側面観

写真 8

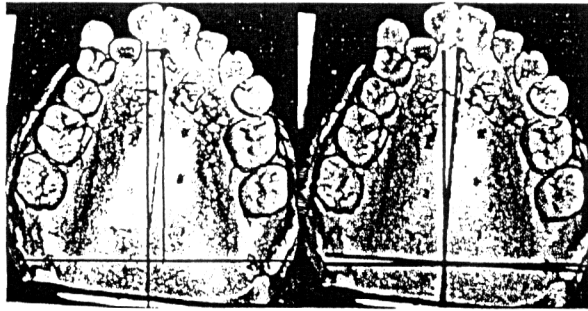


写真8 切歯乳頭は左右ハムラノッチの垂直線上にはない。

甲 5 、 図 1

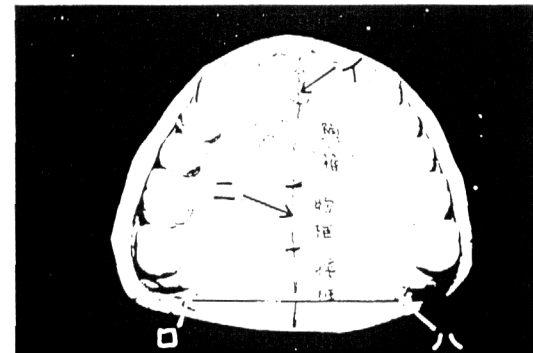


図 1 模型上での印記部位を示す。

イ、切歯乳頭部 ロ、右ハムラノッチ
ハ、左ハムラノッチ ニ、正中口蓋縫合

写真 9

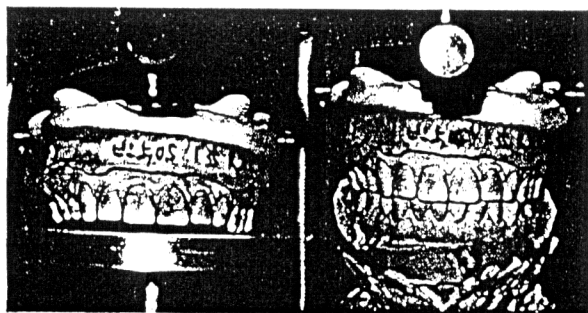


写真9 咬合器付着で解る上顎とカンベル平面の位置関係。
上下の咬合状態は右上がり(顔面頭蓋骨の右後上方回転)
となっている。

甲 5 、 図 2 及 び 3

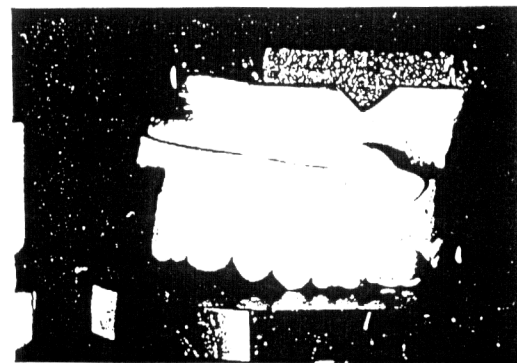


図 2 B・B・O・テーブル上での診断(左側観) 5 頬側
咬頭と 6,7 の舌側咬頭が接しています。

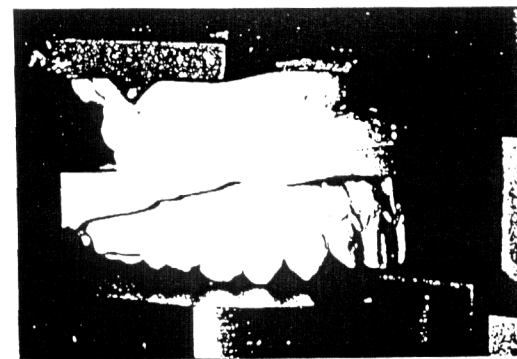


図 3 B・B・O・テーブル上の診断(右側観) 7,6 は、長
さが不足しています。

写真 1 2

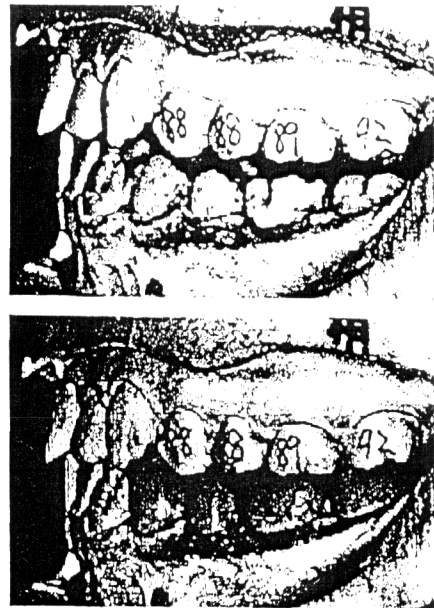


写真12 日本人はこのような臼歯が低位であることが多い。

甲 6 、 図 9



図 9 補綴後の右、側方観を示す。特に 7, 6, 5, 4 | 4 は、咬合改善のため、天然歯の咬合面はそのまま、オンレーにしてある。

類 似 使 用 写 真 (図) 対 照 一 覧 表

甲 9 で使用の写真	甲 1 乃至 8 で使用の写真 (図)
写真 1	甲 8、図 7
写真 2	甲 8、図 8 及び 9
写真 3 (身体立位側面写真の変化)	甲 8、図 1 0 及び 1 5
写真 3 (顔の変化)	甲 8、図 1 2
写真 3 (模型の違い)	甲 8、図 5 及び 1 1
写真 4 (身体の状態の診断と修正方法)	甲 8、図 1
写真 8	甲 5、図 1
写真 9	甲 5、図 2 及び 3
写真 1 2	甲 6、図 9